

研究課題：高校世界史におけるアクティブ・ラーニング型授業の構築に向けて

本研究は、中等学校教育におけるアクティブ・ラーニング、とりわけ「知識構成型ジグソー法」による世界史教育の教材開発の方法論について考察することを目的としている。「知識構成型ジグソー法」とは、東京大学 CoREF によって推進される協調学習法であり、複数のエキスパート資料・課題をそれぞれのグループ学習で深めたうえで、そのエキスパートが 1 人ずつ集まってジグソー・グループを作り、それらのエキスパート知識を踏まえて大きなジグソー課題に取り組むという、アクティブ・ラーニングの方法である。世界史教育についても全国的に実践されているが、まだ教材開発は特定の意欲的な教員の努力に支えられているのが現状であり、本研究によって多くの世界史教員にとって作成しやすいジグソー教材開発の方法が求められている。

教材開発を行うにあたって、機材として iPad 一台（用いるのは教員のみで、生徒は本実践では使用しない）、資料および先行研究となる書籍多数を購入した。また、高大連携を積極的に進める高大連携歴史教育研究会、大阪大学歴史教育研究会、愛知県世界史教育研究会などに積極的に参加し、高校教育現場の実態と、アクティブ・ラーニングに関する最新の教育実践の実例を吸収していった。

本研究では、高大連携の実践として、神戸学院大学附属中学・高等学校および同校非常勤講師の福島雅淳氏の協力を得て、北村が作成したジグソー教材を高校世界史教育の現場で実践し、その効果を測定した上で、改善と試行錯誤を繰り返すことができた。実践したのは協力校の高等部 2 年 4 組（総進サイエンスコース）の 1 クラス、科目は「世界史 A」である。いわゆるテスト期間に入る直前にテスト範囲の振り返りを兼ねて、通年で合計 5 回（5 月、7 月、10 月、12 月、3 月）実施した。

5 月の教材は「ザビエルはなぜ日本に来たか？」とし、16 世紀の大交易時代における「世界の一体化」と日本との関係について考えるものである。7 月の教材は「紅茶はなぜイギリスの国民飲料になったのか？」をジグソー課題とした。10 月の教材は、「イギリス帝国の植民地拡大を 3 つの時期に分けてみよう！」をジグソー課題とした。12 月の教材は、「第一次世界大戦がつくりだした「現代」とは何だろうか？」をジグソー課題とした。3 月の教材は、「ドイツ国民はなぜヒトラーを支持したのだろうか？」をジグソー課題とした。このように、1 年間を通して 5 つのジグソー教材、15 のエキスパート資料を作成した。

これらの教材の実践においては、生徒は最初こそアクティブ・ラーニング型の授業に慣れておらず、複雑なジグソー法を実行すること自体に戸惑っていたが、第 2 回目からはスムーズに実行することができた。教材の問いの入りやすさや、難易度によって明らかに生徒の達成度が異なっており、どのような教材や「問い」が教育目標を達成するために必要なのかを観測することができた。

教材開発を通じて、世界史のジグソー教材開発においては、大まかなテーマを踏まえて、まずエキスパート資料から作成し、それを基礎に大きなジグソー課題を構築する、「下からの」ジグソー教材作成が有効であることを確認した。この研究成果は、『人間文化 (HAS)』第 48 号に論文を投稿し、現在審査中である。また、7 月にオンラインで開催される高大連携歴史教育研究会で、教育実践について報告する予定である。作成したジグソー教材は、Researchmap および高大連携歴史教育研究会 HP の「教材共有サイト」（会員制）で公開し、社会に還元する。